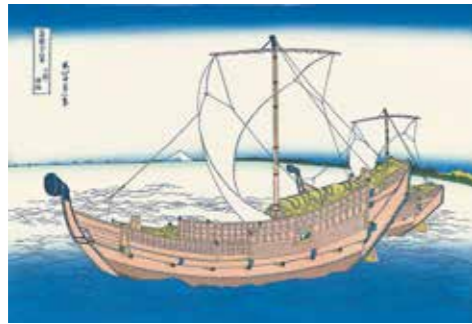




広重が北斎の「富嶽三十六景」に對抗して描いたといわれる「富士三十六景」の中の一図。場所ははっきり分からないが、旧東海道に沿って箱根峠を南下し、三島の街に抜ける道中であろう。常緑の山あいには豊かな水量の滝が勢い良く流れ落ち、その向こうに富士を望む構図が面白い。画面全体が夏らしく鮮やかな緑と藍で彩られている中、真白くとらえられた富士は堂々とその存在を際立たせており、広重の優れた感覚がうかがえる作品である。(34.6×21.6)



葛飾北斎の代表作「富嶽三十六景」の一図。現在の千葉県勝山沖から、帆船ごしに富士を望む。水平線を湾曲させて描く斬新な構図で、彼方まで続く広々とした海原を見事に表現した。また、風に膨らむ帆は、あえてギザギザとした輪郭線ととらえており、目に見えない風をも画面に収めている。色数を抑えながらも快晴の海を表現する的確な配色、完璧なバランスで船体や富士を配置する構図の妙など、北斎芸術の広さと興行を感じさせる名作である。(25.9×38.0)



"急流の滝を登りきる鯉は天まで昇りやがて龍になる"という中国の故事から、鯉は江戸時代当時より立身出世の象徴であり、縁起物とされてきた。歌川派創始者として、多くの優秀な門人を輩出した歌川豊国は、このめでたい図柄を、培った技巧と優れた観察眼で生き生きと描き出した。表情や鱗は細かな描線で描き、微妙な色の変化をつけることで立体的に描かれている。また、水はあえて抑えた薄い藍色にすることで緋色を引き立たせ、漲る鯉の生命力を良く表現した逸品である。(38.3×26.0)



浮世絵の黄金期に美人画の第一人者としてその名を広めた喜多川歌麿が、当時最上級の遊女の一人であった"扇屋内蓬莱仙(おうぎやうちみやひと)"を描いた一図。横兵庫髷を高く結い上げた姿は華やかで若々しく、その表情にはあとけなさもうかがえる。背景には歌麿の美人画に度々用いられる雲母が施され、その愛らしさを一層引き立たせている。紋付の打掛を纏った姿は吉原道中を描いたものとみられ、盛装姿に身を包んだ江戸屈指の美人の魅力余すことなく引き出した一枚である。(38.8×25.7)



10ヶ月の間に140数点もの作品を描き、忽然と消えた謎の絵師・東洲斎写楽が、寛政6年(1794)に桐座で上演された「男山御江戸盤石(おとこやまごのいしずえ)」より、六代目市川團十郎の演じる荒川太郎武貞を描いた一図である。2022年に十三代目襲名で話題にもなった江戸歌舞伎の大名跡、市川團十郎。六代目は、花のある美男役者として名高かった。着物に格式高い三升の紋を背負い、成田屋伝統の荒事芸を演じる様子を、写楽特有のタッチで凛々しくとらえている。(32.3×22.2)

■ 作品送付方法

作品は台紙付で発送いたします。
額縁付作品をご希望の方は¥10,000をご送金ください。
(送料は当財団で負担いたします。)



(28.9×24.4)

少女というのは、大人と子供のちょうど境目にいる。
少女が、大人になるためには、子供らしさというのを、いづらか捨てていかねばならない。
そこには痛みや、苦痛をも伴う。まるで、柔肌に刃物を突き刺すかのような。
この画面には、実は二人の人物が存在する。
刃物をむける「わたし」と、むけられる「わたし」だ。
息を止めて、ふたりは向かい合っている。
彼女が切るのは、緊張の糸か、それとも。

オギハラフウカ

【略歴】

1997年 東京に生まれる
2018年 個展「オギハラフウカ展」(みうらじろうギャラリー bis/東京)
三菱商事アートゲートプログラム奨学生採用
2020年 佐藤太清賞公募美術展 入選
2021年 京都市立芸術大学大学院日本画専攻 修了
2022年 個展「沈黙に坐す」(大雅堂/京都)
個展「天球の聲」(みうらじろうギャラリー @5/東京)
10月より中国美術学院中国画人物創作研究科に在学中

日々の喜びを作品にして人と共感しあえる時間を作りたい、そして誰の記憶にもあるような少しノスタルジック且つ生命の輝きのある内容を柔らかい表現で描きたいと考えています。本作の題材は最近テーマにしている娘と、我が家の猫です。猫を飼っている方にはお馴染みの大好物に興奮する猫と、その様子を楽しむ娘、それを面白がりスケッチをする僕の関係性がこの作品の肝となっています。「現代の浮世絵」になっていると良いなと思います。

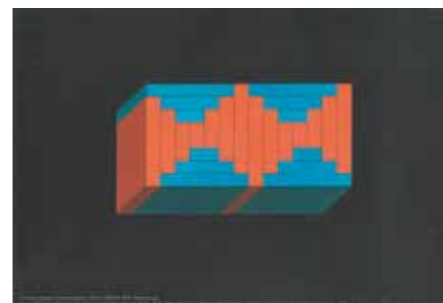
沖谷 晃司

【略歴】

1971年 石川に生まれる
1996年 第5回奨学生美術展(佐藤美術館/東京)
1997年 京都市立芸術大学大学院 修了
1998年 花鳥画展/大賞(松柏美術館/奈良)
2015年 通天閣天井画復刻
2019年 個展「日々の喜び」(ギャラリー恵風/京都)「令和・京・美人」展(銀座蔦屋書店/東京)
2020年 「万人 佳人」展(Art Space-MEISEI/京都)「文学と美術」展(アートスペース袖YOU/京都)
2021年 個展「季節の出会い」(ギャラリー恵風/京都)
2022年 個展「花や猫や女性や・・・」(アートスペース袖YOU/京都)
創画会 会友



(37.0×23.0)



松永真氏は、有名ブランドや化粧品・日用品のロゴデザインの数々を手掛け、世界90カ所の美術館などに多くの作品が永久保存される、日本を代表するグラフィックデザイナーである。本作は、葛飾北斎が染小紋の為に描いた絵手本「新形小紋帳」の図案を、松永氏が立体に起こし、モダンな建造物のように漆黒の背景に浮かび上がらせて一枚の絵として再構成した。色数を最小限に留め、陰影画法で表現された画面は洗練され、浮世絵版画にも通ずる省略美が感じられる作品である。(24.9×36.1)